

# キリスト教主義女子大学学生の 生活態度における民主化の度合 に関する実証的研究 (その二)

雀 部 猛 利  
溝 口 靖 夫  
難 波 紋 吉

## 〔新入生の実態〕

キリスト教主義女子大学に進学した新入生の生活態度における民主化の度合を測定するに当り、抽出した対象数が新入生の場合には、宮城が42名、広島が54名、東京が154名、神戸が182名であったので、宮城と広島は標本の大きさからみて若干の偏りが生じているかも知れない。事実彼女たちの属性について調べてみると、宮城学院、広島女学院、東京女子大学、神戸女学院の四大学の新入生の間には、若干の差違が存在するようである。先ず新入生が抱えている信仰について調べてみると、宮城学院の新入生の21.4%が新教を求道中であったが、受洗者がいなかったのは恐らく標本数がやや少なかった為に現われなかったのであろう。それにしても11.9%の無神論者がいたことは注目すべき数字であった。宗教に関心をもっているが未だ信仰するには至っていない人たちは新入生のうちの71.9%を占めていた。広島女学院の場合には新入生の3.7%が新教の受洗者で、7.4%のものが求道中であったが、この他に旧教を求道するものが1.9%、キリスト教以外の宗教の信者は1.9%いたが、無神論者も5.6%いた。宗教に対して関心はあるが未だ信仰するには至っていない新入生は全体の67.6%を占めている。東京女子大学の新入生の場合には、新教の受洗者が2.0%、求道者が5.9%、旧教の受洗者が1.3%、求道者が

2.0%、無教会派に所属するものが2.0%であって、キリスト教以外の宗教を求信中のものが0.7%でした。しかし無神論と自称する新入生は全体の11.7%で、宗教に関心をもつが未だ信仰には至っていないものが69.6%を占めていた。神戸女学院の場合には新入生の10.6%が新教の受洗者であり、新教を求道中のものが16.2%で、旧教を求道するものが1.1%であった。キリスト教以外の宗教を信じているものが0.7%で、無神論者は8.4%であった。新入生のうちの56.6%のものは宗教に関心をもっているが信仰にまで至っていない学生である。神戸女学院大学に受洗者が多いのは中高部時代に受洗した学生が大学に多く進学しているからである。

従って一般にキリスト教主義大学に進学してくる学生は、他の大学に較べて受洗者および求道者の比率や関心のある者の比率がやや高く、無信論者の比率はかなり低い傾向にあるといえるだろう。(註一)

次に新入生はどのような家庭の子女であるかを理解するために、学生の保護者がどのような職業の人たちであるかを調べてみた。宮城学院の新入生の保護者は、会社団体の職員や公職員が23.8%で最も多く、次に商工業の自営業者の19.1%である。広島女学院の新入生の保護者の職業も宮城学院の場合と同じように、最も多いのが会社団体の職員や公務員で全体の29.6%、商工業の自営業者も29.6%であった。東京女子大学の新入生の保護者の場合には、会社団体の職員や公務員が最も多く22.1%、次に会社重役が17.2%、これについて商工業の自営業者が15.0%、自由業や医師も15.0%であった。神戸女学院の新入生の保護者の場合には、会社重役が最も多く22.4%、次に多いのが会社団体の職員や公務員で全体の21.8%、商工業の自営業者が16.8%、会社の部長クラスが14.0%となっている。また保護者の社会階層を調べてみると、宮城学院の新入生の保護者はロータリーやライオンズクラブの会員が9.6%、管理職以上にあるものが47.6%であり、普通の俸給生活者が19.1%である。広島女学院の場合はロータリークラブの会員が3.7%、管理職以上にあるものが51.8%、普通の俸給生活者が14.8%である。東京女子大学の新入生の保護者はロータリーやライオンズの会員が12.4%、管理職以上のものが

42.3%、普通の俸給生活者が 26.7% である。神戸女学院の場合にはロータリーやライオンズクラブの会員が 3.4%、管理職以上の者が 62.2%、俸給生活者は 23.5% である。

従ってキリスト教主義女子大学に進学してくる学生の家庭は全体的にいったんかなり社会的に上層部に属する社会階層の子女であるといえるだろう。

新入生の家庭の経済階層を測定する方法として、冷温房設備、自家用車、別荘、電話、冷蔵庫などの所有やお手伝さんの使用状況を調べてみたところ、宮城学院の新入生の家庭では、さきに挙げた指標を全く所有しない家庭が42.8%も占めており、他の三大学の場合よりもその比率が高かった。広島女学院の場合にはさきの指標を全く所有しない家庭は新入生の 22.2%、東京女子大学の場合には 10.4%、神戸女学院の場合には僅かに 3.9% に過ぎなかった。この指標を三つ以上所有している家庭を調べてみると、宮城学院では 7.1%、広島女学院では 3.7%、東京女子大学では 18.9%、神戸女学院では 15.7% の家庭が謂わば社会経済的指標の高い家庭であった。従って全学生の 7 割位は経済的に中の上位に属する家庭の子女であるといえるだろう。

家庭の宗教は必ずしも学生が信仰している宗教と一致するものではないが、宗教が個人のものとして確立されていない日本の社会にあっては、家庭の宗教が学生個人の信仰や思想に与える影響も決して少くない。学生の家庭がキリスト教である比率は全体の 1 割にも満たない僅かなものであるが、全国平均からいうならばこの数字はキリスト教徒の比率が高いといえるだろう。宮城学院の新入生の家庭の 4.8%、広島女学院の場合は 7.4%、東京女子大学は 9.9%、神戸女学院は 6.2% がクリスチャン・ホームであった。新入生の家庭がキリスト教に対してどのような態度を示しているかを大学別に表示すると次のようである。

延家族数 実家族数	受洗者家族数	求道者家族数	無関心者家族数	批判者家族数	延家族数 家族数
宮 城 学 院	3( 6.8/ 7.1)	12(27.2/28.5)	25(56.8/59.5)	4( 9.1/ 9.5)	44/ 42
広 島 女 学 院	4( 7.4/ 7.4)	11(20.3/20.3)	35(64.8/64.8)	4( 7.4/ 7.4)	54/ 54
東京女子大学	25(12.6/16.2)	36(18.2/23.3)	109(55.1/70.8)	28(14.1/18.2)	198/153
神戸女学院	32(12.2/17.6)	71(27.1/37.0)	134(51.1/73.6)	25( 9.5/13.7)	262/182

新入生のキリスト教信仰について調べてみると、宮城学院の新入生はその23.8%が求道者で、キリスト教に対して批判的な思想をもつものは4.76%であった。広島女学院の場合には受洗者は5.6%、求道者は16.7%で、計22.3%であるが批判的なものは5.6%で、宮城学院の場合とその様子が比較的似ている。東京女子大学の場合も広島女学院の新入生の信仰状況に近似的な分布比率を示しており、受洗者が3.9%、求道者が16.3%で、計20.2%がキリスト教信仰をもっているのに対し、9.1%のものがキリスト教に批判的である。神戸女学院大学の新入生の場合には他の三大学の新入生よりもキリスト教信仰者の比率が幾分高いようである。受洗者の比率は9.0%、求道者は33.6%で計42.6%がキリスト教の信仰を持っているのに対し、批判的なものの比率は6.2%であった。このことは彼女たちの出身高校がキリスト教系私学であるか否かということに原因しているのではないかと一般に考えられがちであるが、事実は必ずしもそうではない。この調査において抽出された学生に関する限りにおいては、キリスト教系私学の出身者は広島女学院が圧倒的に多く、広島の場合には新入生の96.2%までがキリスト教系の高校から進学しているのに受洗者と求道者を併せても27.7%に過ぎない。東京女子大学の場合にはキリスト教系私学の出身者は僅かに11.1%に過ぎなかったが、受洗者は12.6%、求道者は18.2%という高い比率を示している。東京女子大学の新入生の出身高校の82.3%までが公立高校である。宮城学院も公立高校の出身者が多く、新入生の71.9%が公立高校出身で、キリスト教系私学の出身は35.7%であった。神戸女学院の場合には公立が45.9%、キリスト教系私学が50.6%であった。

次に彼女たちの生活態度における民主化の度合を測定する手掛かりとして若干の質問項目について尋ねてみることにした。先ず最初に新入生が崇拝する人物をもっているか否かについて尋ねてみた。新入生の約半数強の者が崇拝する人物をもっていなかった。崇拝する人物として比較的多く指摘された人はキューリー夫人、シュバァイツァー、内村鑑三などであったが、自分の母を崇拝人物として指摘した学生も少なくなかった。

次に新入生に対しその人生観を調べてみるために、「あなたは神や仏から祝福や加護を受けていると信ずるか否か」を尋ねてみたところ広島女学院と神戸女学院の学生は祝福を受けていると信じている学生の比率が高く、宮城学院の新入生は「神や仏からみすてられているのではないか」と感じている学生が多かった。宮城学院の場合には、「祝福されている」と信じている学生は 7.1% 「祝福されているような気もする」と答えた学生は 23.1%、「神仏から捨てられている」と思っている学生は 11.9% であった。広島女学院の新入生の 11.1% が「祝福を受けている」と信じており、「祝福されているような気もする」と答えているものは 50%、「神仏から捨てられている」と思う学生は 1.9% に過ぎなかった。東京女子大学の場合には、「神仏から祝福または加護を受けている」と信じている学生は 9.9%、「祝福や加護を受けているような気もする」と答えた学生は 29.2% いたが、3.9% の学生が「みすてられていると思うことがある」と答えている。神戸女学院の新入生の場合には「神仏からみすてられているのではないか」と思っている学生は他の大学の学生の場合より少なく、逆に「神や仏から祝福や加護を受けている」と信じている学生が多く、全体の 21.1% が信じており、34.2% のものが「祝福されているような気もする」と答えている。このことは彼女たちの幸福感とも関聯しているようである。「人間の幸福は神の経綸と摂理とによって導かれる」というキリスト教的人生観によって支えられている学生の割合は、宮城学院では 4.8%、広島女学院では 9.3%、東京女子大学では 11.1%、神戸女学院では 15.1% の者であった。また「幸福とはその人の能力と努力によって齎らされるものである」と考えている学生は、宮城学院の新入生の 38.1%、広島女学院の 38.9%、東京女子大学の 35.1%、神戸女学院の 40.3% の者であって、彼女たちの約三分の一強の学生が自力本願の幸福観を抱いている。また幸福は運命によって左右されると考える運命論者の割合は四大学とも約24%前後であった。また「人間の幸福などありえない」という悲観論者の割合は、宮城学院では 2.4%、広島女学院では 3.7%、東京女子大学では 5.9%、神戸女学院では 1.1% であった。人生において大きな不幸に見舞われるようなことがあるとどんな気持ちに

なるかを尋ねてみると、「絶望する」と答えたものは宮城学院では 9.5%、広島女学院では 9.3%、東京女子大学では 7.8%、神戸女学院大学では 11.6% いた。不幸に見舞われたら「試練と考えて発憤する」と答えたものは、宮城学院では 38.1%、広島女学院では 33.3%、東京女子大学では 39.0%、神戸女学院では 36.4% であった。不幸に遭遇しても「必ずまた幸せがくる」と信じて元気をだすという学生が各大学とも最も多く、宮城学院の場合には 42.9%、広島女学院では 40.7%、東京女子大学では 39.0%、神戸女学院大学では 37.0% を占めていた。「この位の不幸ですんでよかった」と感謝する者は、宮城学院の 2.4%、広島女学院の 9.3%、東京女子大学の 6.5%、神戸女学院の 9.0% の学生であった。

結婚した場合には親兄弟と同居したいか別居したいかという点については、一般に親兄弟と「近い処で別居したい」というものが多く、全体の 95% 以上のものが別居を望んでいる。(註二) 宮城学院の場合には 4.8%、広島女学院の場合には 1.9%、東京女子大学は 3.9%、神戸女学院は 4.9% の者が親兄弟との同居生活を望んでいるに過ぎず、親兄弟と近い処で別居したいというのが宮城では 78.6%、広島では 81.4%、東京では 75.4%、神戸では 81.2% に及んでいる。しかし「親兄弟と遠く離れて暮す」ことを希望するものは比較的少なく、結婚して新世帯をもった場合でも「親兄弟と近い処で暮さないと淋しく感ずる」と答えたものが約 7 割にも及んでいた。宮城学院の新入生の場合には遠く離れて暮すのが「大変淋しい」という学生は全体の 28.6%、「少し淋しい」と感ずるものが 47.6%、広島女学院の場合には「大変淋しい」と感ずるものが 29.6%、「少し淋しい」と感ずるものが 40.7%、「全く淋しくない」ものおよび「遠く離れるとほっとする」と答えたものが 5.6% いた。東京女子大学の場合には親兄弟と遠く離れて暮すと「大変淋しく感ずる」ものが 28.6%、「少し淋しい」と答えたものが 41.9%、「全く淋しく感じない」もの及び「離れて暮すことにより開放感を抱く」ものが 5.2% いた。神戸女学院の場合には「大変淋しく感ずる」と答えたものはやや多く、全体の 33.6%、「少し淋しく感ずる」ものが 37.0%、「全く淋しく感じない」ものが 1.7% いた。

次に共同体意識について調べるため、親兄弟が他人から批難されたり、罵られた場合にどんな感情を抱くかを尋ねてみたところ、約2%ほどの極く例外的な学生を除けば殆んどの学生が腹が立ったり、不快な感を抱くと答えている。宮城学院の場合には親兄弟が罵られると「非常に腹が立つ」と答えたものが71.4%、「かなり不愉快な感じを抱く」と答えたものが21.2%いた。広島女学院の場合には59.2%のものが「非常に腹が立つ」と答え、11.1%のものがかなり「不愉快な感を抱く」と答えている。東京女子大学の場合には「大変腹が立つ」と答えたものが56.6%、「かなり不愉快に感ずる」ものが38.3%いた。神戸女学院の場合には全体の70.0%のものが「大変腹立たく感ずるだろう」と答え、「かなり不愉快な感じを抱く」と答えたものは26.3%であった。ところが自分の所属する学校が他の人から批難されたり、罵られたりした場合には、親兄弟に対する場合よりも腹立たく感ずる割合が低下している。宮城学院の場合には35.7%のものが「大変腹立たくし感ずるだろう」と答え、「かなり不愉快に感ずる」ものは57.1%であった。広島女学院の場合には「大変腹立たく感ずる」ものが46.3%、「かなり不愉快に感ずる」ものが40.7%であった。東京女子大学の場合には「大変腹立たく感ずる」と答えたものは29.9%、「かなり不愉快に感ずる」と答えたものが60.5%であった。神戸女学院の場合には42.6%のものが「大変腹が立つ」と答え、53.0%が「かなり不愉快に感ずる」と答えている。処が日本という国家に対して外国人から批難されたり、罵られたりする場合には更にその比率が低下している。従って次の表に示す如く、肉親に対する批難ほど学校に対する批難の場合には腹立たく感ずる比率が高くないし、更にまた学校に対する批難ほど国家に対する批難もまた個人にとっては腹立たく感ずる比率も低くなっている。

共同体意識	宮 城		広 島		東 京		神 戸		計	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
親・兄弟に対して	71.4	26.2	59.2	11.1	56.6	38.3	70.0	26.3	63.0	28.3
学校に対して	35.7	57.1	46.3	40.7	29.9	60.5	42.6	53.0	37.3	54.1
国家に対して	33.3	52.4	33.3	46.3	26.0	57.9	29.7	57.7	28.8	55.0

※ 1は大変腹立たく感ずると答えた比率  
2はかなり不愉快に感ずると答えた比率

次に大学における雰囲気やものの見方感じ方などが家庭における両親のものの見方や感じ方などと一致しているか、それともずれているかを学生に尋ねてみた処、D 8表に示す如く家庭と学校との間における雰囲気にずれがあると感じている比率よりも、一致していると感じている比率のほうが高く、かつまた父よりも母のほうが学校との間の文化的一致を示す比率が高い。学校の雰囲気やものの考え方などは、大学に進んでも娘の場合には父より母のほうがその実情をよく理解している比率が高いようである。

D. 8 表 (1)

価値体系	一 致		ず れ	
	父	母	父	母
宮 城	30.9	51.4	26.2	14.3
広 島	38.8	51.8	3.7	3.8
東 京	32.6	43.6	25.3	17.6
神 戸	36.7	48.5	20.2	20.7

D. 8 表 (2)

価値体系		非常に一致	かなり一致	少し一致	一致 (小計)	どちらでもない	ずれ (小計)	少しずれる	かなりずれる	非常にずれる
宮 城	父	2.4	9.5	19.0	30.9	21.4	26.2	19.0	4.8	2.4
	母	4.8	11.9	35.7	51.4	16.7	14.3	14.3		
広 島	父	3.7	18.5	16.7	38.9	25.9	3.7	3.7		
	母	3.7	25.9	22.2	51.8	25.9	3.8	1.9	1.9	
東 京	父	2.0	23.4	7.2	32.6	27.4	25.3	15.6	6.5	3.2
	母	3.2	27.4	13.0	43.6	30.5	17.6	13.7	2.6	1.3
神 戸	父	1.7	21.0	14.0	36.7	25.8	20.2	12.9	6.7	0.6
	母	4.5	26.3	17.7	48.5	21.8	20.7	16.2	3.9	0.6



両親の躰の型について学生に尋ねてみたところ、両親とも子供に自由を与える比率が最も高い。いま仮りに自分の権威に服従することを子供に要求するような型を権威型、子供の立場を理解しようとせず、いつも小言ばかり言う型を小言型、子供のことは干渉せず、好きなようにさせておく型を放任型、いつもとやかく子供の世話をやく型を世話型、目に入れてもいたくないほど可愛がり、子供の要求を何でもきくのを盲愛型、子供を大事にし過ぎ自分に頼らせるように仕向け等型を保護型、融通が利かず、禁止ばかりして子供にいろいろなことを押しつける型を抑圧型、子供にいろいろ期待をかけるのを期待型、責任の伴うような自由を子供に与えている躰を自由型と名付けるならば、父と母との躰の型には若干相違する点がみうけられるし、大学間にも少し特色がみられるようである。

D. 9 表

四大学の平均	権威型	小言型	放任型	世話型	盲愛型	保護型	抑圧型	期待型	自由型
父	7.4	3.5	16.2	3.0	2.1	1.2	0.9	8.3	36.3
母	1.4	7.2	11.5	8.3	1.6	1.8	1.2	11.3	43.7

両親の躰の態度で最も多いのは責任を伴う自由型で、父親の 36.3%、母親の 43.7% が自由型であった。母に較べて父親のほうが多いのは放任型と権威型であり、父に較べて母親のほうが多いのは自由型、期待型、世話型、小言型である。

家庭のなかで彼女たちのものの考え方や行動を最も拘束する権威の所有者は父であり、次に母である。また彼女たちの大学進学に対して両親の反対している比率は極く僅かであり、殊に母親が娘の進学に反対する比率は僅か 2% に過ぎない。

D. 11 表

娘の進学	賛成		反対	
	積極的	消極的	消極的	積極的
父	69.7	11.5	2.8	0.5
母	77.5	13.8	1.6	0.5

従って娘に対する拘束力は母親よりも父親のほうが若干多く現われている。処が彼女たちが両親に対してどんな態度をとっているかを調べてみると、一般に父親に対するよりも母親に対するほうが敬服感や親和感が多く、また母親に対するよりも父親に対するほうが逃避や反撥や批判や無視の態度が多いようである。

D. 12 表

親 対 して	敬 服 ・ 親 和	逃 避 ・ 反 撥 ・ 批 判 ・ 無 視
父 対 し	62.0	30.4
母 対 し	76.0	15.5

彼女たちの家庭と社会との間の文化的、社会的雰囲気の一貫性について調べてみると、両者の間における雰囲気やものの見方、感じ方にずれがあると答えた学生の比率は比較的少なく、全体の約1割程度に過ぎない。

D. 13 表

家 庭 と 社 会	一 致 し て い る	ず れ て い る
宮 城	49.2	11.9
広 島	46.3	16.7
東 京	54.0	14.3
神 戸	52.7	7.9
四 大 学	52.0	11.5

彼女たちは現在の大学の学生であることに誇りを感じているかについて尋ねてみたところ、約5%の学生が劣等感を抱いているが殆んど7割以上の学生は誇りを感じていた。劣等感を感じるというのは彼女たちが自己の要求目標を必要以上に高く掲げているために起る現象であるから、精神衛生的なカウンセリングを行えば解消しうるコンプレックスである。

処が大学での専攻学科について学問的な研究の興味や喜びや楽しみを感じることがあるかという質問に対しては、新入生の場合には未だ専攻学科について直接触れる機会が殆んど皆無に近いめか、興味を感じることがないと答えるものが4割近くいた。

学生たちに学校と社会との間における雰囲気やものの見方についての一致度を尋ねてみたところ両者の間にずれがあると感じている学生の比率は東京女子大学や神戸女学院に比較的多く存在し、両者の間是一致的と感じている学生の比率は宮城学院や広島女学院に比較的多かった。

D. 16 表

大学と社会	一致している	ずれている
宮城学院	52.4%	14.3%
広島女学院	64.8	11.1
東京女子大学	19.5	26.7
神戸女学院	26.3	36.4
合 計	39.1	27.2

彼女たちが国旗に対する感情をどの程度強く抱いているかを知るために、日の丸が踏みつけられるのをどう感じるかを調べてみたところ、約5%足らずの学生だけが激しい憤りを感じると答えるだけで、約1割弱の学生はたいしてなんとも感じないと答えている。戦時中の学生のように国民的な緊張を激しく示している時代に較べると戦後の学生は国旗や国家に対する感情は比較的稀薄なものになっているといえるだろう。

学生たちは自分の人生観、社会観、世界観を実践の場において貫くために、最も多く活動しうると考えている社会集団がどの分野であるかを尋ねてみたところ、学生であるという身分的な拘束性から当然それは学校集団であると答えるものが最も多く、全体の36.4%を占めていた。宮城学院の新入生の場合には、学校集団が全体の50.0%、家庭集団が19.0%、地域社会が9.5%であったが、広島女学院の場合には学校集団が38.9%、家庭集団が24.0%、国際社会が9.3%であった。東京女子大学の場合には、学校集団が39.0%、家庭集団が20.8%、職業集団が9.1%であったが、神戸女学院の場合には家庭集団が32.9%で第一位を占めており、これにつづくものが学校集団の29.1%、国際社会での活動が13.4%となっている。従って全体としては学校集団について家庭集団が一般に挙げられているのに神戸女学院の場合には家庭の次に学

校である。第三位に挙げられている活動の分野は広島と神戸は国際社会を挙げ、宮城は地域社会を挙げ、東京は職場を挙げている処に、その大学の地理的特色と歴史的社会的背景を反映させている。

彼女たちが結婚の相手を選択する場合に重視する条件を調べてみると、終戦直後の経済的困窮の激しい時代とは異り相手の人格的なものを重視する傾向が増加している。四大学全体では選択条件の第一位は愛情であり、これについて健康、生活力、人格の信頼、教養の順となっているが、各大学によって若干ベスト・ファイブの順位が異っている。

D. 19 表

結婚相手選択の条件	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
宮 城 学 院	愛 情 16.0	健 康 14.4	生活力 14.4	人格の信頼 8.2	精神的健康 5.3
広 島 女 学 院	愛 情 14.9	人格の信頼 11.9	健 康 11.6	教 養 10.2	精神的健康 6.6
東 京 女 学 院	愛 情 15.0	健 康 13.1	人格の信頼 11.8	生活力 10.8	教 養 10.0
神 戸 女 学 院	愛 情 14.0	健 康 14.0	生活力 11.8	人格の信頼 9.7	教 養 9.3
全 体	愛 情 15.0	健 康 13.8	生活力 12.1	人格の信頼 10.9	教 養 10.1

次に彼女たちの家庭に先祖から伝わる家風やしきたりについて尋ねてみたところ、そのなかには尊重して保存すべきものと改善するために破棄せねばならないものもあるが、保存しようとは思わない学生が 6.4% いたが、過半数の学生は自分たちの考えと相容れないようなものは捨てたいと考えていることが解った。戦後社会制度の大きな変革によって古い伝統的なものの考え方も次第に影をひそめるようになってきたが、娘が親を扶養するという義務観念（法律的な規定とは無関係に）も次第に薄らいできたと一般に言われているが、調査の結果によればキリスト教主義女子大学の新入生には、そのような風潮はあまりみられなかった。彼女たちの僅か 0.7% が嫁に行っても扶養の義務を負いたくないと答え、1.2% のものが相続をした者が親を扶養すればよいと答えているに過ぎず、大半を占める 63.3% のものは必要があれば扶養すると答えているし、嫁に行っても当然扶養する義務も負うし扶養もすると答えている者が 23.2% もいた。従って親に対する扶養の義務観念はそれほど薄らいで

はない。

彼女たちが生活の場において自分たちの理想を実現してゆくために積極的な努力を続けているか否かについて尋ねてみたところ、積極的な努力をしているものは全体の 28.6%、少し努力しているものが 30.7%、積極的には別に努力していないものが 40.6% を占めていた。従って理想を実現してゆくための使命観を抱いて生きている学生は約 3 割近くいるのではなかろうか。それではどのような生活空間で理想や抱負を実現する努力をしているのであろうか。積極的に努力している学生の場合には、主として自己の人格形成の面における努力が第一位を占め、全体の 38.9% に相当する。少し努力しているという場合も人格形成が第一位で 29.6%、次に家庭生活の場における実践が 21.0% となっている。処が「別にとりあげていうほど積極的にしていないが」とことわっている学生の場合には、名声を挙げたいと感じているものが 21.5%、社会的に活動したいと思っている者が 20.7% いた。従ってキリスト教主義大学の新入生の場合には、学生たちは自己を内面的に掘り下げてゆく態度は積極的であるが外部に向って働きかける点では一般に消極的であるといえるだろう。

次に生活の合理化という点について考察するために慣習的な非合理的なものは捨てるようにしているのか、或いは不合理と感じても慣習に従ってゆくほかという点を尋ねてみた。全体的にみれば氏子や信者でなくても祭の寄附に應ずるなど比較的慣習的なものに従う学生が多かった。また学生が支持している主義主張をみても最も多いのは民主社会主義的な立場で全体の 20.7%、これにつぐのが修正資本主義的立場の 18.9% であった。

D. 24 表

支持する主義主張	資本主義	修正資本主義	民主社会主義	社会主義	共産主義	U. D.
宮 城 学 院	11.9	4.8	28.6	14.3		40.5
広 島 女 学 院	14.8	9.3	13.0	9.3		53.7
東京女子大学	11.1	31.2	18.2	9.1	2.0	28.6
神 戸 女 学 院	14.0	26.1	24.1	7.3	0.6	42.5
全 体	12.7	18.9	20.7	8.7	0.9	35.2

キリスト教主義女子大学の学生の生活態度における民主化の程度に関する分析は次号の在学生の資料と比較検討の上で論じることにする。従って本論考においては新入生の生活態度についての調査結果を紹介するに止めておくことにした。

(註一) 1958年に実施した女子大学学生モラルに関する研究資料によれば、全国女子大学連盟に加入する14校の一年生の宗教に関する資料は次の通りであった。

女子大学連盟14校		本 調 査 4 校	
宗教を信じているもの	19.1%	{受洗者、信者 8.2%} {求道者、求信者 13.3%}	計 21.5%
関心をもっているもの	52.2%	関心をもつもの	62.1%
信じていないもの	20.7%	信じていないもの	9.4%
その他	8.0%	その他	7.4%
(キリスト教主義学校6校を含む)			

(註二) 1958年に実施した女子大学学生モラルに関する研究資料によれば、全国女子大学連盟に加入する14校の一年生の別居に関する資料は次の通りであった。

女子大学連盟14校		本 調 査 4 校	
絶対に別居したい	22.9%	別居したい	14.4%
出来れば別居したい	48.1	近い処で別居	77.7%
出来れば同居したい	8.2	同居したい	4.1%
絶対に同居したい	1.4		

# Research on the Degree of Democratization of Student's Life in Women's Christian College in Japan (II)

## Résumé

Taketoshi Sasabe  
Yasuo Mizoguchi  
Monkichi Namba

1. This report gives the data of the survey on freshmen of Miyagi Gakuin College, Hiroshima Jogakuin College, Tokyo Woman's Christian College and Kobe College. A comparative study of freshmen with sophomore, junior and senior will be given in the next report.
2. Among the above four woman's Christian colleges, Tokyo Woman's Christian College is the only one without an attached high school and Kobe College is the only college without junior college.
3. Freshmen of these four Christian Colleges were of families belonging to comparatively high socio-economic status. However the family which adheres to Chistianity as family religion accounted for less than 10%.
4. Since the data obtained from Miyagi Gakuin College and Hiroshima Jogakuin College were comparatively few, it may be dangerous to estimate the parameter of these two colleges from the statistics. However, taking this into consideration, among the freshmen of Miyagi Gakuin College and Tokyo Woman's Christian College, more than 70% were graduates of public high schools. In Kobe College and Hiroshima Jogakuin College, on the contrary, the graduates of Christian high schools comprised about 50% and nearly 96% of the freshmen, respectively.

5. Some similarities as well as differences were found in the degree of democratization of freshmen's life in these four Colleges. We shall report on the degree of democratization by the education in Christian Colleges in the next report.